障害者（児）の居場所～橋渡しの立場から～

社会福祉学部　社会福祉学科　2 年　武澤　花音
活動先：特定非営利活動法人 PakaPaka
担当教員：岡久美子

①　自分の成長と気づき

私は特定非営利活動法人 PakaPaka でのサービスラーニングを通して、障害のある子どもを障害児と捉えるのではなく、一人の子どもとして捉えることを意識するようになった。確かに障害があるという事実は揺るがないが、それぞれの子どもに長所や短所があるのは障害のない子どもと変わらないと分かったからだ。障害があるために難しいことや苦手なこともある。しかし、その分得意な分野にはとても集中して取り組むことができる。サービスラーニング先で一緒に活動した子どもたちはみんな自閉症と診断された子どもたちだった。感情のコントロールが難しい子やパニックになりやすい子がいたが、その子たちは工作や物作りが得意だったり率先して手伝いをしてくれた。見た目も何らほかの子どもたちと変わらないのだ。「障害」という言葉でいかに自分が身構えてしまっていたかがわかる。「障害」という言葉は障害の程度に関わらず身構えさせてしまうのだ。

これは障害のある子どもだけではなく成人した障害のある人にも言えることだ。障害があろうと一人の人として捉え、接したり支援を行わなければならない。「障害」という言葉でその人のことがよく見えなくなってしまっているのかもしれないが、一人の人として捉え、その人の長所や短所を知ることが大切なのだ。サービスラーニングを通じてそのことをしっかり感じるようになったことが、私が気付き・成長したことである。

②地域や市民活動の現状や課題

この 1 年の活動を通じて、障害者の社会での居場所の少なさを感じた。この知多半島にはたくさんの NPO 法人がありたくさんの障害者がそこで活動しているが、障害者が社会に出て肩身の狭くない居場所があるかと聞かれたらそうではない。

サービスラーニング先の NPO 法人では主に発達障害（自閉症）の子どもの療育や家族支援に力を入れていた。子どもだけでなく、その保護者と関わることで生活の中で困っていることや将来への不安などを知ることができ、また、そのことをほかの保護者に相談したり共有する機会が多くあった。私は同じサービスラーニング先に行ったメンバーより保護者の方の話を聞く機会が多かったのだが、そこで出てきた話には、子どもと外出できる場所が少ない、子どもに対応できるヘルパーが少ない、将来子どもたちはどうなるのかなどが多かったように感じた。

私は実際にサービスを提供する支援者側だけでなく、実際にサービスを利用する当事者側である。妹に障害があり、実際に就労移行支援を活用している。私はサービスラーニングで保護者の方の話を聞いていて、他人ごとではなかった。むしろ共感できる部分が多かった。

私は後期のゼミで障害者の就労支援について調べたが、所得の低さや障害者雇用の現状

を知り、サービスラーニング先で保護者の方から聞いた話が理解できた気がした。所得の低さは生活を十分に送れない可能性があり、親亡き後の生活がどうなるか分からない。障害者雇用は近年進んできてはいるが職場の周りの人から理解が得られないなど働きにくい環境になっている。保護者の方が言っていたように、子どもの将来に対する不安の要素が多い。実際に私も妹の将来に対して不安を感じている。

障害者がもっと社会参加できる環境ならば、社会に居場所が増えるのではないか。施設や制度が充実するだけでは環境は整わない、周りの人からの障害に対する理解が何よりも大切だと私は感じる。そうすれば障害者の雇用問題などにもっと関心を持つ人が増えるだろうし、障害者やその家族が気軽に街に出ていけるようになる。居場所作りは人々の障害者に対する偏見などの意識改善から始めなければならない。

家族支援の必要性と事前準備の大切さ

社会福祉学部　社会福祉学科　２年　原　奏恵
活動先：特定非営利活動法人 PakaPaka
担当教員：岡久美子

自分の成長と気づきについて

SL の学びの中で、多くの気づきを得ることができた。事前学習では ABA（応用行動分析学）について初めて知り、その実践に興味をもった。障害特性を調べたり、NPO 法人の助成金について学んだりした。先輩の話や NPO 法人の方の話の中に、「主体的に学ぶ」という話があった。そこで主体的に学ぶとはなにか考えた。主体的に学ぶとは、自分で目標を持ち、目標を達成するために行動することはもちろん、視野を広く持ち、ほかにやるべきことや課題をみつけることであると考えた。

特定非営利活動法人 PakaPaka での夏休みの活動は、子育てサロンや造形教室、座談会、集団療育、個別療育の実践に入らせていただいた。活動の目標は「活動先の目標や課題を自分なりに見つける」と設定した。活動ではたくさんの学びがあったが特に家族支援の必要性がわかった。障害を抱えた方、本人に対する制度や支援は必ずなくてはならない。そして、その人に支援が必要ということはわかりやすい。しかし、その家族に対して支援が必要だということは気がつきにくい。外出がしにくかったり、兄弟のどちらかに障害を抱えた子どもがいるとそちらの子どもばかりに手がかかってしまったり、相談できる場がなかなかなかったりする。保護者の方は PakaPaka の家族サロンについて安心して相談できる場だとおっしゃっていた。障害を抱えた子どもを持つ親同士でつながりができたり、情報を共有できたり、悩みを打ち明けられたりする場になっている。そのような場の提供はこれからさらに求められるし、まだまだ困っている方がいるのではないかと考えた。本人に対しての支援だけでなく、家族に対する支援の制度が必要ではないだろうか。

また、集団療育の放課後デイの場で企画実践をおこなった。デイでの様子を撮影し、そのコラージュ写真をいれるフォトフレームづくりをおこなった。そこでは、あらゆる場面を想定して考える必要性に気が付いた。作成し終わり手持ち無沙汰になってしまった時間にどうするかということを考えておらず、子どもたちを不安定な気持ちにさせてしまった。事前準備をしっかり行い、見通しを立てておくことの必要性を実感した。特に障害のある子どもはスケジュールが組み立ててないと不安になってしまうことが多い。特性を理解し、対策を考えておくべきだった。このことは他のところに生かしていきたい。何事にも準備をしっかりたて、あらゆる場面を想定しておくことは大切だろう。見通しを持つことは私に足りないところだと気が付いたので意識してできるようにしていきたい。

その後の研究では障害のある方の自立とはなにかについて考えた。興味を持ったことに対して、文献やインターネットを用いて調べて、まとめて、発表した。一番実感したことはわかりやすく伝える難しさである。わかりやすく、理解しやすいように、問題提起に対して考えてもらえるように、ということが大切だ。それが満足いくようにできなかった。プレゼンテーションでは原稿を読むのではなくて、メモや箇条書きを用意しておいて自分の言葉で伝えられるようにすることを目指している。SL のプログラムのなかで三回発表する機会があり、初めに比べたら少しずつできるようになったと感じる。これから人に伝え

る力をさらに鍛えていきたい。

活動先について

私が SL の実践を行った活動先は特定非営利活動法人 PakaPaka である。「きみの世界をおもしろく」という理念をかかげ、発達障がい児とその家族に対して支援を行っている事業所だ。ABA を中心とした個別・集団療育や保護者の方々の座談会、家族支援ためのイベントをおこなっている。理念や家族支援に興味を持ち、この活動先を選択した。

PakaPaka が担っている役割は家族支援をしっかり行い、その重要性について社会に伝えていくことであると考える。目の前の困っている人を助けていくことも重要だが、社会に働きかけていくことも重要である。あいちコミュニティ財団のミエルカで寄付を募っており、資金集めとともに家族支援について発信している。公的でない家族支援のサービスを確立していくことが課題であり、それを目指していると考えた。また武豊町のリフレッシュカフェを利用し、保護者の方の座談会を行っている。地域のサービスを活用し、活性化や地域住民のつながりの構築にも貢献している。地域や障害を抱えた子ども、その家族のために活動をしている。

武豊町だけではなくほかの地域からも PakaPaka を利用したいと来てくださっていると聞いた。PakaPaka が培ったノウハウや実践を広めていくことはできないだろうか。家族支援を受けたいという人は全国に大勢いる。家族支援や療育をおこなう後継者を育てていくということもこれから求められるのではないかと感じる。

机の上の学習では学べなかったこと

社会福祉学部　社会福祉学科　2 年　前田　朱音
活動先：特定非営利活動法人 PakaPaka
担当教員：岡久美子

・　自分の成長と気づきについて

私は、特定非営利活動法人 PakaPaka という発達障害児とその家族に対して包括的な支援を行っている法人にお世話になり、6 日間活動させていただいた。その活動を通して私が成長したと感じることが主に 2 つある。1 つ目は、発達障害児との関わり方だ。発達障害児と関わるのはこの SL が初めてだった。そのため、最初はどうやって関わっていけばいいのか正直のところわからなく戸惑っていた。なぜなら、発達障害児は自分の世界を持っており話しかけても返答がなかったりまったく違った返答が返ってきたりと、コミュニケーションがうまくとれていないと自分自身感じていたからだ。そのため、子どもと話すときも遊ぶときも私と関わっていて楽しいのだろうかという不安ばかりで子どもと関わる時間がすごく苦痛だった。しかし、職員さんの「自分自身楽しめば子どもたちもきっと楽しいはずだから難しく考えずに子どもとその場を思いっきり楽しめばいい」という言葉を聞き、子どもとの関わり方・考え方が間違っていたのだと気づかされた。今までの発達障害児との接し方を振り返ると私は発達障害児と関わるとき心から楽しむことができておらず、むしろ楽しむという心を忘れていた。また、発達障害児との間に壁を作り、健常者の子どもとは違う関わり方をしなくてはと無意識に考え、障害があるからとレッテルを貼っていた自分がいるのだということに気づかされた。その気づきから、特別扱いせず、尚且つ自分自身も楽しめるように子どもと関わっていくようになった。そうしていると次第に発達障害児との関わりが少しずつわかるようになり発達障害児自身も楽しんでいるという実感を持つことができた。最初は発達障害児との関わり方がまったくわからなかったが SL を通して関わり方が少しわかるようになった事が自分の成長したところではないかと思う。

2 つ目は、当事者意識を持つことができるようになったことだ。SL をする前までは「当事者意識で考えなさい」といわれても自分の身近な問題と捉えるきることができずどうしても第三者の考えでしか地域の問題を見ることができていなかった。しかし、SL を通して実際に当事者の立場に立ち、自らが保護者や支援者の話を実際に聞き、現状を体験して今何が一番問題で何が一番必要とされているのかなど地域の問題について身近に考えることができた。そして、自分自身に置き換えることができ地域の問題は地域だけの人たちだけでなく自分たちにも関わっており、さらには社会全体が関わっているのだと気づかされた。そのとき初めて当事者意識という言葉を認識することができた。また、ゼミ内での報告会や研究発表などでその人が体験した話や地域の気づき・問題点などからも自分にもできることはあるのだと実感させられ身近に感じることができた。SL という経験・体験をしていなければ本当の意味での当事者意識という意味をわかることはなかった。だから、SL を通して当事者意識を持ち問題に取り組むことができたことが私の成長ではないかと思う。

・　活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

活動の中で造形教室という活動に参加させていただき、子どもと一緒に T シャツ作りを体験させて頂いた。そこで子どもたちが伸び伸びと自分のやりたいように T シャツを作っ

ており活動しているときの目がすごくキラキラしていた。そのとき、子どもたちが伸び伸びと表現できる場があるという事はこんなにも素晴らしいことなのだと気づかされた。しかし、障害のある子が一般の習い事に行くことは思った以上にハードルが高く理解ある場でないと参加しづらいという現状があり、そのため子どもたちが表現できる場が少なく様々な経験をさせたいと親が思っていてもなかなか現実しにくい現状があった。そして、障害に理解がない場とある場では親の安心感も違い SL 報告会でもやはり障害理解がある環境を作ることが大切だと感じた。また、集団療育に参加させていただいたとき障害児が集団の中で活動するにはたくさんの大人の目が必要になるなと感じた。しかし、地域や社会の現状を見たとき、障害児の人数に対し支援者の人数が足りていない。そう考えると集団の中で子どもが学ぶ環境を作るためには親・支援者のネットワークや地域のネットワークをしっかりと築きたくさんの目で障害者を支えられるような環境を作ることが必要だ。したがって、障害を抱えていても子どもが自由に表現できる場・安心して親も参加できる場を作っていくことが今後の地域課題なのではないか。また、地域の中で障害者が生きていけるようネットワークを作りあげていくことが今後の課題ではないかと考える。私自身ももっと障害についてこれからも勉強し地域の一人として障害者が安心して生きやすい・学べる環境を少しでも早く整うようできることから始めていきたい。

特定活動活動法人 PakaPaka での現場体験を通しての気づき

社会福祉学部　社会福祉学科　2 年　和田 達也
活動先：特定非営利活動法人　PakaPaka
担当教員：岡 久美子

① 自分の成長と気づきについて

私は特定非営利活動法人 PakaPaka で現場体験をし、多くのことを学んだ。それは、知的障害や自閉症といった障害だけでなく、「子ども」が何を考え、どう行動しているのか、というとても人間的側面での学びが多いものだった。「障害」と「個性」の同一視論が浸透してきた現代であるが、私はそうは考えていない。6 日間の間で触れ合った子どもたちは、みんなさまざまな個性を持っていた。人見知りだったり、落ち着きがなかったり、言うことを聞かなかったり。果たしてそれが障害によるものなのか。確かに、障害の種類によっては症状が性格や個性に多少なり反映されることはあるだろう。しかし、それは客観的な目線から見た価値観である。そもそも、個性とは自己の考えの中にあるものであり、「何が嫌いか、何をしたいか、何が好きか」といった自身の中にあるものが、本来の個性である。この気づきを現場での体験で知り、私は「障害だから」というフィルターを外すことができた。障害者とは不自由なもので、手帳を持っているだけで障害者と言われ、施設に通っているだけで障害者と言われ、社会には邪魔な存在として見られてしまうことが多い。そこには、偏見や差別によって関わりを持たずして障害者を認識している背景が社会に根強く反映されているためである。それは、日々取り上げられる報道における障害者の記事に、ボランティア活動や交流、支援活動の記事は小さく記載される反面、傷害や事件における記事は、「障害者である」という特性を大々的に報道し続けているからである。社会が障害者を本当の意味で理解するためには、障害者の社会活動の活発化や、地域交流といった、私たち地域で暮らす人々の身近な存在として認識することを広げていくことではないかと私は考えた。

② 活動を通して

もし、自身の子どもに障害があると診断されたとき、それを受け止めるまでにどれほどの苦悩が存在するだろうか。PakaPaka では地域活動として、子どもに対しての支援だけでなく、親を対象とした学習会や子育てサロンといった相談のできる場を提供している。当事者である子どもを支援することも必要だが、その基盤としての親の支え造りをしていくことによって、家族の家庭生活の質の向上といった生活するうえでの重要なよりよい家族関係を形成することに繋がる。こうした地域活動の場をつくることは、支援者と当事者家族の関係を形成することだけでなく、当事者家族同士の繋がりといった、地域間での横の繋がりを広げることができる。こうした事業支援者だけでなく、地域当事者が一人の支援者として援助を広げていくことこそ、「社会福祉の増進」という言葉がふさわしいものだと私は考える。

知的障害、自閉症を持つ子どもに対しての療育施設は、社会から見てもまだまだ数の少ない事業であり、地域に頼れる施設がなく困っている方や、施設定員数の上限により利用することのできない当事者家族が増加している。PakaPaka での体験学習を通し、

集団療育や相談支援といったさまざまな特色の支援を知ることができた反面、このような現状を知り、こうした事業が展開されている環境が、どれほど恵まれているのかを考えることができた。日常生活を送るうえで、私たちは、ないものを見つけることは得意だが、存在するものに対しては不自由を感じることがないため、その存在自体を忘れてしまいがちである。これは福祉の地域によって変化する格差にも言えることであり、困窮してしまったあとではなく、そうならないための福祉ニーズの社会共有を行わなければならないのだ。普段触れ合う福祉にも、地域間での特異性や特徴を見つけ出すことによって、それらを発信していける人材の育成につながり、地域だけでなく、社会としての福祉ニーズを満たすことにつながると、サービスラーニング活動を通して気づくことができた。

③ 後期の研究を通して学んだこと

後期の研究を通し、私は「地域での市民性」、地域社会での活動参加と活動発信といった地域住民としての役割について知ることができた。それは、現場における体験学習だけでなく、研究をし発表を行うといった、地域活動の存在を発信していくといった役割も必要であり、それら総括的な活動を含めた「地域活動」に触れることができた。また、地域での活躍を担う福祉職従事者の人材育成として、こうした地域における課題、特色を現場で把握、そしてそれらに対しての「社会」という側面での包括的な目線をむける研究に取り組むことが重要である。その 2 点が重要な理由は、双方のバランスレベルが高いほど、地域活動のクオリティが変化していくことが挙げられる。それは、「座学」による知識理解と「現場」における学習理解が異なるものであることから、現場での活動に対して、研究的思考を加えることでの課題を見出すといった、福祉を学術、科学と同じ目線での研究を行うことである。つまり、地域課題に対して、福祉、科学（医療)、学術、社会といったさまざまなアプローチでの研究を向けること、そしてその課題発見としての現場活動をすることによって、地域社会の隠れたニーズを引き出すことのできる人材育成に繋がると私は考え、学ぶことができた。